

妙覺寺祖師堂の保存修理について

研究員 廣岡 幸義

1. はじめに

京都府指定有形文化財^{みょうかくじ そしどう}妙覺寺祖師堂は平成24年11月から27年10月までの36ヶ月の予定で屋根葺替え及び部分修理の保存修理工事を行っている。現在屋根解体、小屋組・軒廻り木部修理工事がおおむね終了し、順次屋根瓦葺き及び堂内木部工事を着手するところであり、全体工程の折り返し点に至った。本稿では、これまでの修理経過と祖師堂の特徴について報告する。

2. 妙覺寺について

妙覺寺は日蓮宗の本山寺院で北龍華具足山妙覺寺と称し、妙頭寺・立本寺とならぶ三具足山の一である^(註1)。永和4年(1378)に妙頭寺から分派した開山日実が開創し、はじめ京都市内の四条大宮に寺地を構えていた。その後衣棚二条(京都市中京区)に移り、天正19年の秀吉の市街区改造により上京区北辺に「寺の内」がつけられ、現在地に移る。衣棚町時代の寺地は「上妙覺寺町・下妙覺寺町」として町名が残り、現在の寺地は妙頭寺・本法寺・妙蓮寺などの日蓮宗本山寺院が麓を連ねる一画にある。



図1 妙覺寺位置図

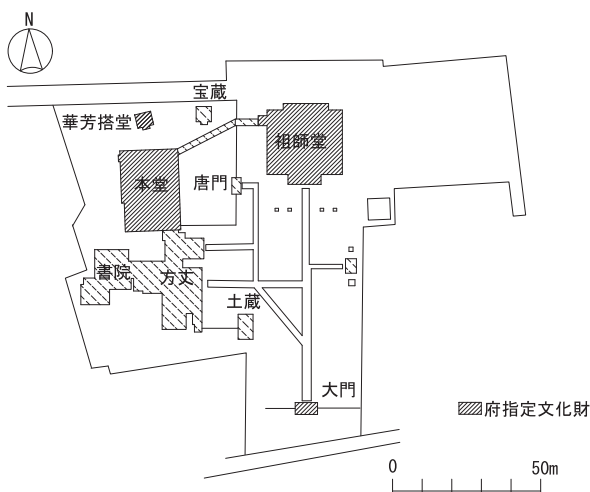


図2 妙覺寺境内配置図

3. 伽藍について

妙覺寺伽藍は祖師堂を中心堂宇とする独特の伽藍配置を持つ。中心軸線上に大門と祖師堂が南北に並び、核となる景観を形成している。祖師堂の西には土塀で区画された本坊の一角があり、唐門を東向きに開き、その軸上に本堂を配置する。本堂の北には宝蔵・華芳塔堂が並び、本堂の南に方丈と書院が建つ。子院は善明院、實成院、玉泉院からなる。

本堂・祖師堂・華芳塔堂・華芳塔堂内に安置される華芳宝塔・大門は京都府指定有形文化財に指定されており、本堂・祖師堂が江戸後期の建築、華芳塔堂・大門は江戸前期、華芳宝塔は室町時代後期の建築であり、現在の寺地に伽藍を構えて以後、各時代に建築された諸建物が残っている。(図2)

安永年間(1772-81年)「都名所図会」記載の妙覺寺伽藍は、天正年間に現在地に移ってからのおち整備され、天明大火焼失までの時期を描いている。現在の伽藍と異なる点が多く、本堂を中心に、東に祖師堂、西に鬼子母神堂がそれぞれ南面してならび、方丈が本堂の背後に位置する。その他に多宝塔、番神社、楼門、花芳塔、浴室が配置され、周囲に多数の子院が存在した。本堂が中心に据えられるが、御影堂とも称された祖師堂は本堂に比べ規模が大きく、当時から祖師堂が重視された伽藍であった。

現在の伽藍は天明大火後に整備されているが、祖師堂東に建っていた仮本堂は明治期に破却され、大門は昭和30年代に現在地に移築し、近現代も伽藍の変遷が続いている。

京都市内の日蓮宗寺院と伽藍比較をしてみると、本堂が中心的堂宇で祖師堂が従属的な位置としているのが通例であり、妙覺寺が独特な伽藍配置をしていることがわかる。また祖師を中心にする宗派は、御影堂を中心堂宇とする浄土真宗・浄土宗がよく知られている。

4. 祖師堂について

4-1. 祖師堂の平面と構造形式

祖師堂には日蓮と、日蓮六老僧の一人である日朗、妙覺寺の開山日像を祀る。構造形式は桁行七間、梁行五間、一重、入母屋造本瓦葺、向拝三間、背面突出部桁行三間、梁行一間である。

平面構成は正面から奥行一間を外陣とし、それより奥行四間は間口中央三間を

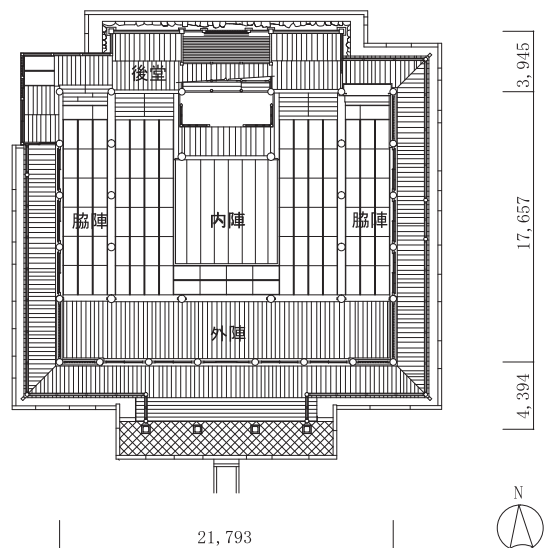


図3 妙覺寺祖師堂平面図

内陣、両側の間口一間幅を脇陣としている。各部の床高は同じで、敷居で分けられているが、建具をはめ込まず一体的な空間である。内陣には背面柱筋を来迎柱とする四天柱を立て、須弥壇を置く。来迎壁背面は後堂である。背面西側は本堂に至る渡廊下が接続する。背面側中央の土間面に開口の痕跡があるが、天明期焼失前伽藍には北に本坊があったことから、本坊への通路を想定した出入口と思われる。現在は後堂として床が張られ塞がれている。また東縁勾欄が一部途切れた痕跡があり、明治期に破却された仮本堂への渡廊下がここにあったとみられる。

天井は、外陣は虹梁をかけた上に鏡板天井、脇陣は棹縁天井、内陣は折上格天井、内陣四天柱内を小組格天井としている。

軸部は亀腹上の礎石に柱を建てる。本体部分は円柱、背面突出部分は角柱を用い、地長^{なげ}押、半長押、腰長押、内法長押、飛貫^{かしらぬき}、頭貫^{だいわ}が通り、台輪上に禅宗様肘木の出三斗^{でみつど}を乗せ、桁^{なかにぎ}を受ける。中備は台輪上に^{かえるまた}墓股を置く。妻面は^{にじゅうこうりょうたいへいづか}二重虹梁大瓶束とし、一重虹梁には三組の三斗、二重虹梁には^{そぼん}墓股がのる。正面向拝は礎盤に角柱を立て、柱上に皿斗・三斗を置き桁^{たばさみ}を受け、手挟^{たばさみ}を設ける。中備は墓股、頭貫の両側面は獅子頭^{ししがしら}の頭貫木鼻とする。内陣四天柱で囲まれた範囲は立登せ柱に出組の挿肘木と虹梁がかかり、中備は虹梁上に出組がのる。

建具は正面中央間五間を腰付障子を嵌め、内法上に菱格子欄間を嵌める。正面両端間、側面の正面側一間と背面側一間は連子窓とする。両側面中央三間は諸折棧唐戸を吊り、渡廊下の接続部に引違板戸をはめ、他は漆喰壁とする。内部の各室境に小壁がめぐり、内外陣境中央には菱格子が嵌められている。

平面は祖師堂でありながら日蓮宗本堂の形式と同じく、機能的に中心堂宇としての役割を果たすことが求められたことと思われる。このような祖師堂の扱いは関東地方に多くみられる。また日蓮宗本堂では内外陣境は^{しじゆど}部戸を吊り、外陣を吹き放ちとする例が多くみられるが、外陣を内部空間に取り入れている手法は江戸時代後期建築の特徴を表している。なお他事例の祖師堂の特徴は外陣が吹き放しで、内陣は間仕切りの無い空間、重層屋根などの要素を持つ。

4-2. 祖師堂の建築経緯

祖師堂は天明大火(1788年)以前に本堂が建っていた位置に建つ。大火後の文政10(1827)年頃から再建準備が開始され、文書により天保6(1835)年に建設されたことがわかる。なお大鬼瓦、向拝唐獅子に天保4(1833)年の銘、縁高欄擬宝珠に天保12(1841)年の銘が確認でき、屋根瓦が葺かれ主要な工程を終えた後も、長期間にわたり工事が進められ

たようである。なお側面には棧唐戸が嵌めこまれているが、正面側には建具の軸穴を開けながらも扉が釣り込まれていない。現在においても祖師堂は未完成ということもできる。

4-3. 祖師堂の修理歴

祖師堂の竣工後の経緯は数点の棟札から昭和期の修理歴がわかる。竣工から約120年経過した昭和27年に修理内容は不明であるが、大工その他による工事が行われた。その後昭和39年に電気設備の改修・増設が行われた。昭和41年に大棟の屋根瓦が「御室理助」の手によって修理され、続いて昭和48年にも大棟の屋根瓦が「太秦住人兼吉」により修理されている。昭和57年には宗祖第七百遠忌記念事業で大屋根の修復が行われた。昭和63年8月には台風11号の通過により、大棟の東側鬼瓦際の屋根が抜け落ち、瓦の修復とともに、棟木の両側に新しく母屋を追加して小屋の補強を図る工事が行われた。その後、平成19年に、軒の垂下が著しくなり、飛檐垂木の折損もみられたため、軒下に枠足場を組み応急的に軒を支えて後の大規模修理を待った。このように昭和27年以降約10年間隔において屋根修理を継続的に行い、今回の大規模な修理に至った。

5. 破損調査と修理方針の立案

平成23年に行った調査により、現在まで根本的な修理が施されていないため、屋根瓦の破損が進み耐用年数が過ぎていること、小屋組・床組の破損、飛檐垂木の折損、軒の垂下、縁廻りの蟻害、北西の下屋部分の不陸などの破損・腐朽状況が確認された。この調査結果から屋根瓦の葺き替え、小屋組・軒廻りの修理、北西下屋部の不陸調整、床板・床組・縁の木部補修を行うこととした。また耐震診断の結果により耐震補強工事を行うこととした。以下に屋根工事・木工事の内容と調査により明らかになった事、検討事項を記す。

6. 各種工事の仕様と調査事項

6-1. 屋根工事

屋根瓦はいったん全数解体し、再用可能な瓦は再用する方針であった。強度試験の結果、所定の強度が得られず全数新調へ方針を変更し、一部けらば下の雨掛かりの少ない部分に旧瓦を保存再用することとした。鬼瓦も同様に割れが多く、約半数を新調、残りを補修して再用することとした。

仕様を調査すると、平瓦長さ一尺五厘、葺き足四寸八分の二枚重ねで、平瓦相互の空きが一寸五分であり、単位面積当たりの葺き枚数がかなり少なく葺かれていた。一方土居葺はスギを用い、厚さ一分、長さ一尺、葺き足一寸七分であり、瓦葺きと対照的に葺き足の

短い高い仕様となっていた。土居葺は表面の傷みが比較的激しく、当初あるいは改修時に瓦が乗せられず土居葺きのままで、さらされていた期間が相当あったことが想像された。

巴瓦・軒瓦共に9種類の文様が確認できた。修理の都度、その時代に作られた瓦が葺かれた結果と思われる。(図4・5)

鬼瓦は全て鬼面とし隅鬼・二の鬼・妻降鬼は鬼面と宝珠を刻んだハリガワが一体である。降り鬼・大鬼は面とハリガワが別に作られ、大鬼はさらにハリガワ部分を5分割し、^{ひれ}鱗部分も3分割して組み合わせている。(図6)

瓦銘は各所で多数確認できた。「日比屋太兵衛」が最も多く大鬼西と南西・南東稚児鬼、北東・南東妻降り、南東・北東・北西唐獅子^{へらがき}に篋書されていた。平瓦に刻印されている「大ふつ太兵衛」も同じ太兵衛かと推定される。「与兵衛」、「㊦」は同一人物と思われるが南西唐獅子、南西妻降りにみられた。「伊兵衛」は大鬼東に刻銘されている。瓦銘から太兵衛・与兵衛・伊兵衛の3組の班に分かれて工事が進められたことがわかる。部材点数上、日比屋太兵衛が主導的な役割をはたしていたとおもわれる。その作風をみると太兵衛の大鬼は彫りが深く迫力



図4 巴瓦(当初)



図5 唐草瓦(当初)

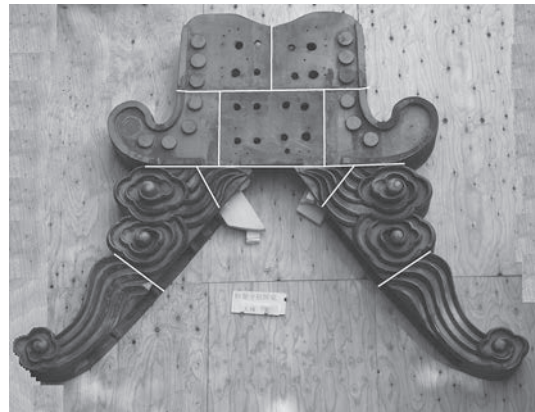


図6 大鬼(東)ハリガワと鱗



図7 大鬼西(銘:太兵衛)



図8 大鬼東(銘:伊兵衛)

あるものであるが、伊兵衛の作品は太兵衛の作と同意匠としながらも平坦な印象を受ける古式な造りとなっており、職人による個性の差が大きく表れている。(図7～9)

その他役物では切隅瓦が一体となった「トンビ」、後世の修理時の構法である台輪のしを一体化した「のし形」が特殊な瓦である。(図10・11)

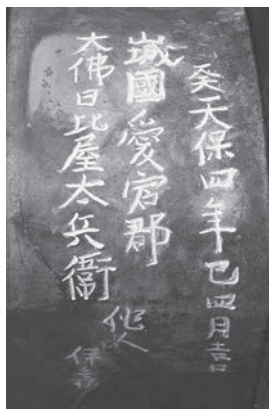


図9 太兵衛 籠書・刻印



図10 トンビ

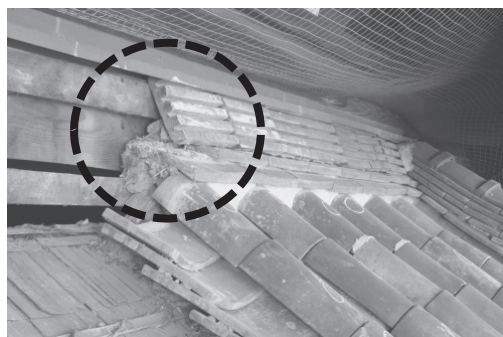


図11 のし形

6-2. 木工事と軒構造の検討

木工事は野垂木を全部解体し、軒は飛檐垂木、地垂木の一部、出梁を残して部分解体とした。軒まわりは飛檐垂木の折損、軒の垂下が著しく、これらの問題の改善が今回の修理の要点であった。解体過程では、特に注意して調査を行った。

軒の構成を詳しくみると、化粧部分は地垂木と飛檐垂木^{ひえん}からなる二軒の化粧軒である。野材部分は木負^{きおひね}桔^{はねぎ}と出梁、桔木^{はねぎ}桁、桔木^{はねぎ}からなる。木負桔と出梁は平面的に交互に配置され、おのおのの鼻に桔木^{はねぎ}桁をのせる。桔木^{はねぎ}桁を支点に桔木^{はねぎ}を置いて、飛檐垂木を介して軒先を跳ね上げる構造となっている(図12)。この軒の構造は出梁が軒に組み込むことで小屋組と軒が一体的になる。また桔木の支点となる桔木^{はねぎ}桁が桁から持ち出しになり、桔木の支点から鼻(軒先の荷重の作用点)までの長さを短かくとる事ができる特徴が確認できた。一方以下の2点の問題点も同時に確認できた。

- ① 木負桔は支点となる桁から内部側の尻長さが極端に短く、跳ね上げる機能が非常に低い。また材が短い上に急勾配に取り付けられているためバランスが崩れると軒が下

がりやすく、木負を下方に押し下げる。

- ② 地垂木・飛檐垂木は支点となる桁・木負から内部側への引き込みが全く無く、本来期待される跳ね上げの構造的役割を果たさず、化粧材として荷重になっている。

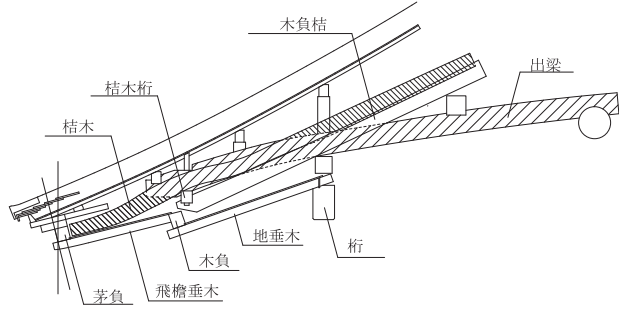


図12 修理前の軒断面

これらの問題を解決するため検討を行い以下の修理方針とした。

- ① 木負桔の断面を大きくし長尺材に取り換える検討をした。しかし他材との取合いの関係上、複雑に入り組んだ小屋材間の隙間を縫うような曲がりくねった材の確保が難しいと

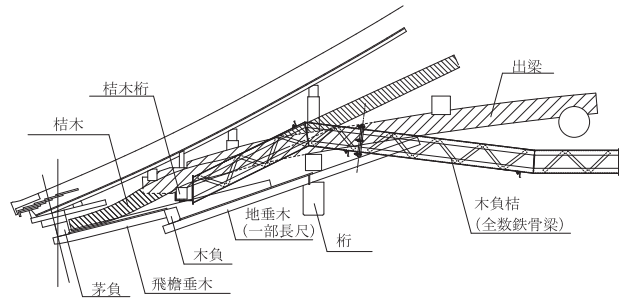


図13 修理後の軒断面

判断された。そこで自由に折れ曲がりを作ることのできるトラス構造の鉄骨でこれをおき換えることを検討した。結果300mm角断面（一部幅を150mmとした）で実現する事ができることが明らかになり、木負桔22本を鉄骨トラス梁に置き換えた。この内、木負桔の一本だけは旧状のまま保存した。（図15の①）

- ② 地垂木は桁から内部への引込みをとるため、桔木間毎に2本ずつ長尺材に置き換えた。飛檐垂木は成を高くして部材強度を高めた。また桔木と飛檐垂木の接点で集中的

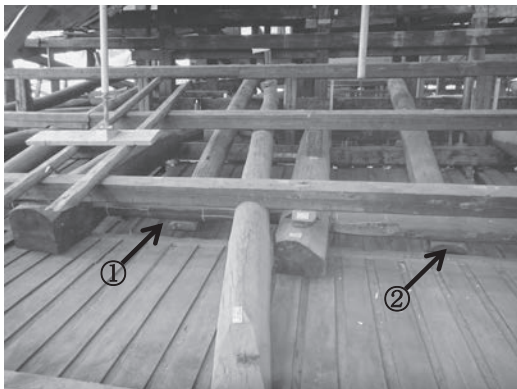


図14 修理前の軒 東面

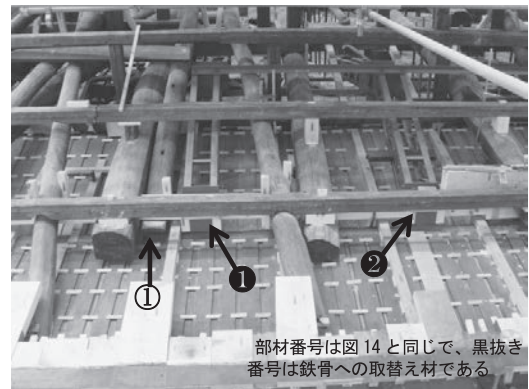


図15 修理後の軒 東面

に力が係らないように、
桔木鼻に杓子柄を造り茅
負に差して軒先全体で荷
重を受けるようにした。
断面が小さく、短い桔木
は長尺材に取り換えた。

木工事は軒構造の補強
ののち、布裏甲と切裏甲
を矧木補修の上再取付け
し順次復旧した。屋弛み
の曲線調整は母屋にパッ

キンを挟みこんで行い、野垂木を順次とりつけた。北西の渡廊下との取合い部分の不同沈下はジャッキアップを行い、礎石と柱の間に鉛板を敷き込み不陸を修正した。

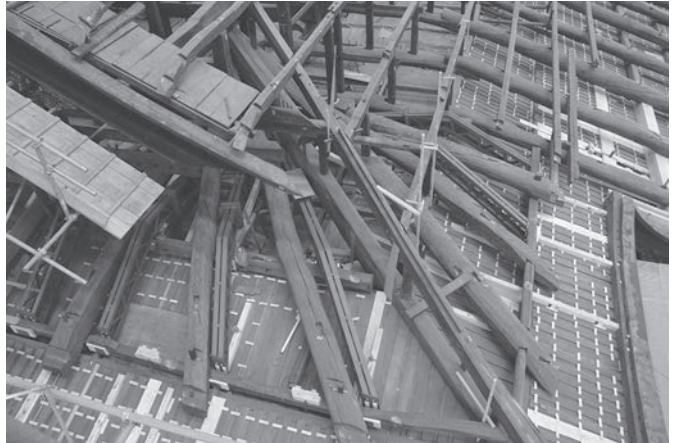


図16 桔木補強状況（西南隅）

7. 終りに

工事は工期約1年を残し、瓦葺工事、内部木工事を進めて竣工を目指している。解決すべき課題もおおむね消化し、以後の工事進捗は滞りない状況になっている。

ところで本工事では工事前に軒まわりの構造検討を行っていたが、工事進行に伴い軒構造を解体したことでより詳細な調査が可能になり、施工途中段階で改めて詳細な構造検討を行い、修理方針の方向修正を図った。修理方針は構造検討の結果をもとに、構造担当者と大工棟梁を交えて何回もの協議、試行錯誤を重ねて組み上げた。その結果木造建築の長所を大いに取り入れることができた補強方法となったと思っている。伝統的な日本建築は深い軒をいかに軽々と跳ね上げるかが大きな課題といえるが、この古くて新しい課題に取り組む機会が得られた。

注

- (1) 日蓮宗は身延山久遠寺を総本山とし、日蓮聖人に関する重要な遺跡、歴史的背景を持つ寺院を霊跡・由緒寺院とし、その伝統により大本山・本山と称する。京都市内の霊跡寺院は妙顕寺・本圀寺であり、由緒寺院では妙覺寺・本満寺・本法寺・立本寺・頂妙寺・妙傳寺がある。妙覺寺は本山寺院である。

参考文献

- 1 京都府教育委員会『京都府の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』1983年
- 2 京都府教育委員会『京都府の文化財 第十四集』平成9年3月
- 3 丹波博亨『近世京都日蓮宗妙顕寺、妙覚寺、要法寺の伽藍配置』日本建築学会計画系論文報告集第402号1989年8月
- 4 櫻井敏雄『洛中法華宗本山妙覚寺の伽藍について―日蓮宗寺院伽藍配置の研究(1)―』日本建築学会近畿支部研究報告集 昭和52年5月
- 5 太田博太郎監修 井上新太郎著『本瓦葺の技術』昭和49年 彰国社
- 6 本隆寺『本隆寺本堂及び祖師堂調査報告書』平成25年8月
- 7 竹下弘展『重要文化財 知恩院集會堂の保存修理工事について』「建築史学」52号 2009年3月